

カール・メンガーとその時代

The period and lifetime of Carl Menger

カール・メンガーの生涯

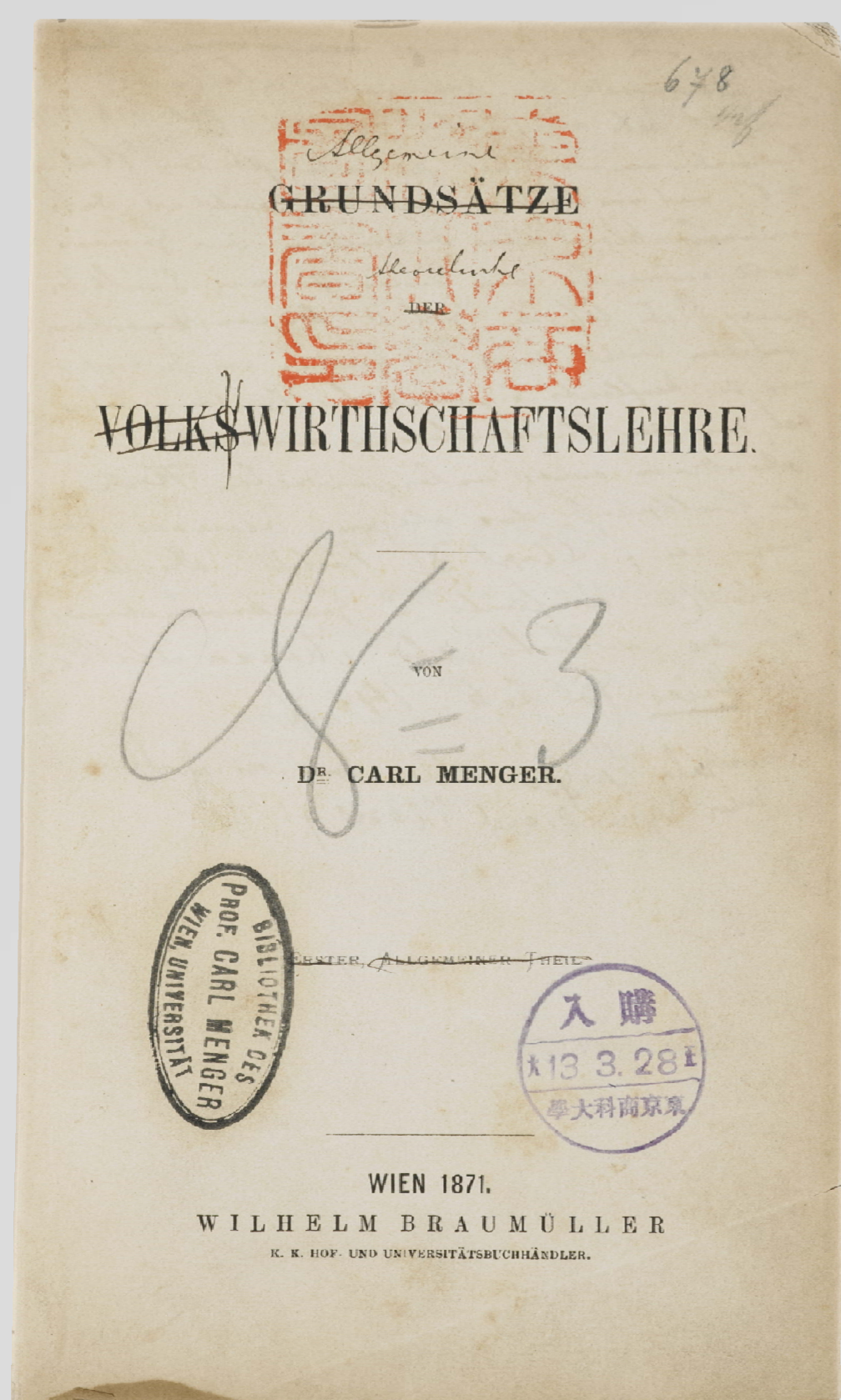
カール・メンガー(Carl Menger)は1840年、ノイ・ザンデツ(現ポーランド南部)にて3人兄弟の次男として生まれた。クラクフでギムナジウム課程を終了後、1859年にウィーン大学に入学、翌年プラハ大学に移り、63年まで法学を学んだ。その後、記者となり、新聞の創刊に関わるなどジャーナリストとして活発に活動しつつ、1867年頃から経済学の研究も開始した。1868年から70年にかけては記者活動を断続的に行いながら、主著となる『国民経済学原理』の執筆を行い、71年に出版している。1872年にウィーン大学私講師、73年に助教授となり、76年にはオーストリア皇太子ルドルフの個人教師に任命された。メンガーが教師を務めたのは約1年の短い期間であったが、この気鋭の学者の学問や社会に対するリベラルな姿勢は、ルドルフの自由主義的な思考の形成に大きな影響を与えた。両者の関係は、ルドルフが宮廷の保守的な空気の中で孤立し、自ら命を絶つ1889年まで続いた。1878年から1902年まではウィーン大学経済学教授として後進の指導にあたり、退官後に『国民経済学原理』の改訂を企図したが発表には至らず、1921年にウィーンで死去した。



1903年撮影。メンガー63歳の時のもの。

カール・メンガー年表

1840	1848	1859	1863	1867	1871	1872	1873	1876	1878	1902	1903	1921	1933
ノイ・ザンデツに生まれる	父と死別	ウィーン大学法・国家学部 に入学	新聞記者となる	クラクフ大学より博士号 取得	『国民経済学原理』出版	ウィーン大学私講師となる	ウィーン大学助教授となる	オーストリア皇太子ルド ルフの個人教授となる	ウィーン大学経済学教授と なる	息子カール誕生	ウィーン大学を辞職	ウィーンにて没	『国民経済学原理』増補第 二版が息子によって出版さ れる



『国民経済学原理』著者特製本。メンガーによる書き込みが確認できる。

『国民経済学原理』と「限界革命」

『国民経済学原理』でメンガーは、財の価値が効用(消費者の満足度)によって定まることを主張し、財の価値が労働によって定まるとした従来の労働価値説に対して、新しい価値の捉え方を提示した。この限界効用理論は、メンガーのほか、イギリスのウィリアム・スタンレー・ジェヴォンズ、スイスのレオン・ワルラスによって同時期に独立して唱えられ、経済学理論の展開に大きな影響を与えた。これを古典派経済学から近代経済学への転換点と捉えて「限界革命」と呼ぶこともある。メンガーの学説を受け継ぐ経済学者の一派はオーストリア学派と呼ばれ、ヨーゼフ・シュンペーターやフリードリヒ・ハイエクなどの高名な研究者を輩出した。